

地域にゆかりの建物を活かす

—伊勢市外宮前山田地区 旧御師丸岡宗大夫邸—

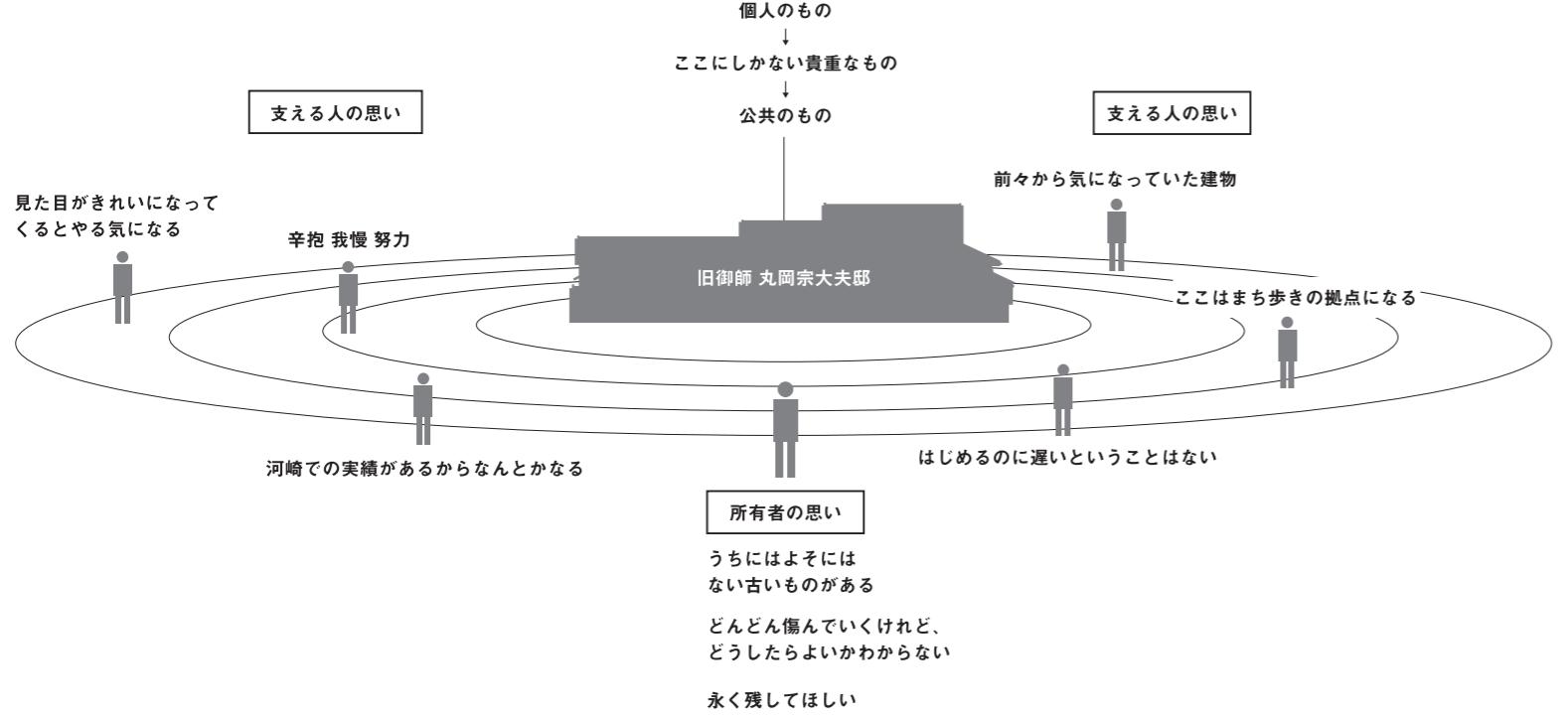
住まいとコミュニティづくり活動助成事業

第1回 実験プロジェクト

# 地域にゆかりの建物を活かす

—伊勢市外宮前山田地区 旧御師 丸岡宗大夫邸—

現在、全国の様々なところで、歴史的建造物など地域にゆかりの建物を活用したまちづくりが行われています。伊勢市外宮前山田地区に現存する旧御師 丸岡宗大夫邸も貴重な建物の一つです。本冊子は、住まいとコミュニティづくり活動助成事業の実験プロジェクトとして、この旧丸岡邸を取り上げ、歴史的建造物の保存と活用について検討したものです。



旧丸岡邸正面

## I 旧御師丸岡宗大夫邸について

### 旧丸岡邸

明治4(1871)年の御師制度の廃止まで代々御師を営んでいた丸岡宗大夫の館 床面積233m<sup>2</sup>／敷地面積608m<sup>2</sup>

### 1. 旧丸岡邸の特徴等

1602年に現在地に建てられたが、その後何度も火災にあい、安政の地震(1954年)で大きな被害を受けた。現在の建物は慶応2(1866)年に改築されたもの。

丸岡宗大夫は、大阪や信州に8,000軒ほどの檀家を持つ中規模の御師で、御師邸の中には当時の接待の様子を物語る古文書や衣装(袴など)、食器などが残されている。

御師制度の廃止や戦災の影響、規模の大きな御師邸の旅館への転用、道路拡幅による撤去などによって、現在、長屋門や屋敷全体が現地に残されているのは、この旧丸岡邸のみである。

### 2. NPO法人旧御師丸岡宗大夫邸 保存再生会議について

地元で、歴史的建造物等の保存活動等を行っていたメンバーを中心になって、旧丸岡邸の保存・活用のために平成22年10月に再生会議を結成した。丸岡邸の所有者と建築士、郷土史研究家、木漆工芸家など建物や郷土の歴史に関心のある者が主要なメンバーとなっており、構成員は現在10人である。平成23年度の住まいとコミュニティづくり活動助成の助成対象団体である。平成24年4月NPO法人化(保存再生会議の平成23年度の活動については、「第19回 住まいとコミュニティづくり活動助成報告書」参照)。

### 3. 御師について

御師(おんし)は、お伊勢参りの参詣客の世話をした神職等で地区の自治組織の中心的な役割も担っていた。参詣客の世話をするという意味では、現代の旅行エージェントと旅館業を合わせたような性格と考えることもできる。

伊勢土産を持って全国の檀家を巡り、伊勢講(町や村などの集団の中でお金を出し合い順番にお伊勢参りに出かける仕組み)の組織化にも貢献した。伊勢講の代表者が伊勢に到着する際には、講ごとに決まった御師が迎えに出るとともに、参詣客は御師邸に泊まってもてなしを受けた。

最盛期には、伊勢に御師邸が約800軒あったといわれている。

## II プロジェクトの実施方法と経緯

旧丸岡邸の現地調査及び先進事例（揚輝荘）の現地調査を行うとともに、選考委員と現地及び先進事例の関係者を交えた意見交換を行った。これらを踏まえて、今後の旧丸岡邸の活用方策を検討した。現地調査等の経緯は以下の通り。

### 1.平成23年10月3日

旧丸岡邸の現地調査及び意見交換（旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議メンバー、選考委員及び財団事務局）

### 2.平成24年3月2日

揚輝荘の見学及び意見交換（旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議メンバー、揚輝荘の会メンバー、選考委員及び財団事務局）

### 3.平成24年6月10日

旧丸岡邸で行われたイベント\*への参加と現地調査  
並びに意見交換会

#### ＜意見交換会参加者＞

旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議：

阿形次基、高橋徹、丸岡正之、野嶋峰男、山口久志、阿形智恵子

伊勢郷土会（再生会議の協力団体）：石井昭郎

揚輝荘の会：佐藤允孝

選考委員：鈴木輝隆、高見沢実

財団事務局：大内朗子（\*イベントのプログラム：御師の歴史講義、旧丸岡邸の見学会、隣家の料亭での御師料理体験会）

#### ＜揚輝荘＞

松坂屋の創業者が、1918(大正7)年に名古屋市東部の覚王山の約1万坪の森を切り開いて造った別荘。完成時には30数棟の建物と庭園が威容を誇っていた。現在の敷地は3千坪ほどで数棟の建物と庭園が残っている。

揚輝荘の会は、揚輝荘の保全・管理を行うことを目的に2003(平成15)年に設立された(2006年NPO法人化)。2007(平成19)年に揚輝荘が名古屋市に寄付され、団体は活用・管理に関する業務を受託している。なお、当会は、2004(平成16)、2005(平成17)年度の「住まいとコミュニティづくり活動助成」事業の助成対象団体で、建物の一部の改修、実測調査、イベントなどが助成対象活動であった。



## III 旧御師丸岡宗大夫邸の課題

歴史的建造物である旧丸岡邸の文化的な価値を保全していくために、最終的な着地点を見出しが長期的には必要であるが、当面、本建造物を一部活用しながら維持管理と保存再生活動を継続していくことが求められている。以上の認識のもと、保存再生会議では、以下の課題を挙げている。

### ① 整備の段階と活用のバランス

活用するためにどの程度の整備が必要か

### ② 整備にかかる経費のねん出

寄付金などに頼りながら団体としてできる範囲

### ③ 行政との関係

公共資産として市が関与することの可能性

### ④ 市民の理解

歴史的文化的価値とともに馴染みのある建物として

市民の意識を醸成する



## IV 旧御師丸岡宗大夫邸の保存と活用

### 1. 意見交換の中から 現地における意見交換の中で、次のような意見が出された。

#### ① 環境整備について

- ・一部分でもきれいにするとメンバーのやる気が生まれ、市民にも残していくべきだというイメージを与えられる
- ・ハードを整備して初めてソフトを動かすことができる 見た目は重要である
- ・作業は短い時間（2時間程度、実働1時間半）ならば負担にならない月に一度でも続けられる 無理をしない

#### ② 活動の取り組み姿勢について

- ・様々なことが合致して飛躍する時が来るので、それまで徐々に浸透させていくつもりで取り組む
- ・ずっと続けていかないとモノは生まれてこない

#### ③ 公共性の共有について

- ・行政が担保すべき建物だと認識してもらうためには、行政への周知が必要
- ・行政マンに熱心なファンが存在することは重要である
- ・地域に開かれた場であることが必要
- ・建築物としての価値だけではなく、建物に物語がなくてはならない
- ・所有者の残すという意志は非常に重要

#### ④ 揚輝荘の活用方策から

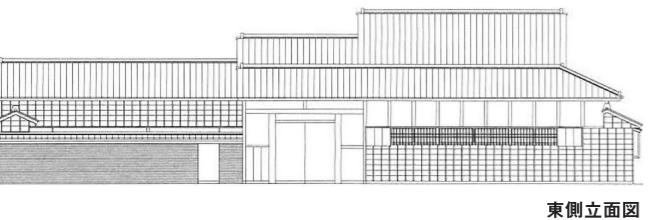
- ・市民に分かりやすい活用とする（揚輝荘では、音楽会の開催、生け花のワークショップなどを開催）
- ・屋根の修繕等、市民には見えづらい活動は、市民に見えるようにする工夫（イベント等）があるといい

#### ⑤ 御師文化の情報発信基地として活用のために

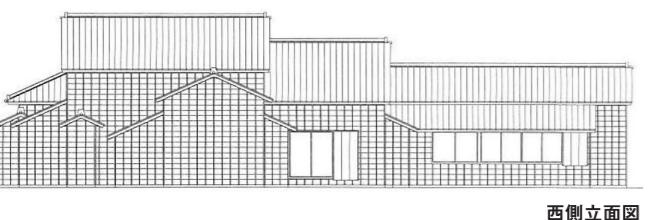
- ・檀家等御師時代の交流相手の調査を行う
- ・伊勢市内の元御師の家の拠点調査的役割を果たす
- ・来訪者、参詣客の見学施設、立ち寄りどころ、休憩所とする
- ・小中学生の歴史・文化の体験施設とする
- ・隣家の料亭などで御師料理を定番にして業につなげる
- ・近隣の商店街を含めた回遊性の確保 地域経済への波及

#### ⑥ その他

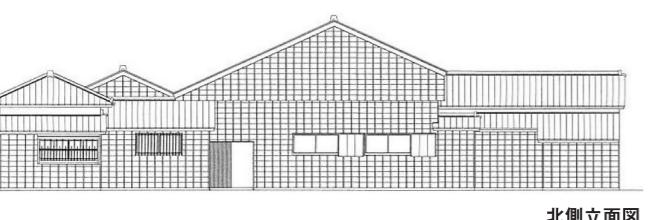
- ・市民を味方につけることにより公の課題にのせる。それにより役所を動かすことができる。
- ・揚輝荘で、イベント参加者にアンケートを取ると、建物保存の意義を理解し応援団になってもらえた。



東側立面図



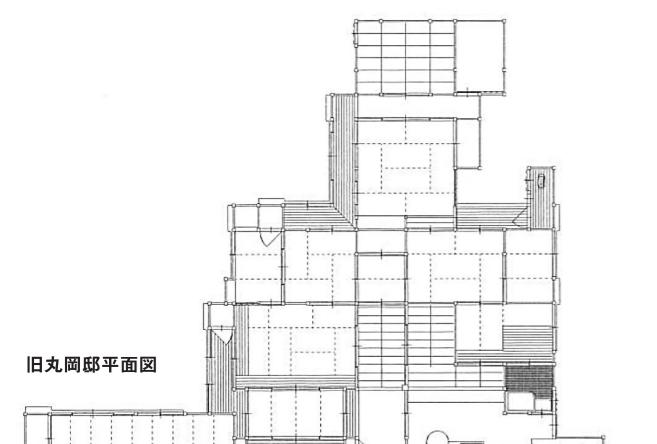
西側立面図



北側立面図



南側立面図



旧丸岡邸平面図

## 2. 選考委員等のコメント

### 「揚輝荘の会」からみた御師邸の活用 (NPO法人 揚輝荘の会 専務理事 佐藤 兼孝)

NPO法人揚輝荘の会は、平成15年に任意団体として発足し、同18年にNPO法人となり、同19年から揚輝荘所有者の名古屋市から活用・管理の委託を受けて活動しております。現在は、本格改修前の暫定管理ですが、平成25年度からは一部、本格修理が終わり、指定管理者が募集される予定になっており、当会はそれを目標にしております。

揚輝荘は、名古屋市の東郊、千種区にある、松坂屋百貨店の創業者・伊藤次郎左衛門家15代・祐民が築いた別荘で、社交場→迎賓館→アジアの留学生の寄宿舎→日本軍の接收→進駐軍の接收→松坂屋社員の独身寮などと数奇な運命をたどってきましたが、戦災、老朽化、マンション開発などによって、30数棟あつた建物は、5棟（他に土蔵5棟）となり、敷地も1万坪から3千坪弱になりましたが、主要部分の建物、庭園は残され、平成19年に名古屋市に寄付され、平成20年には建物5棟が市の有形文化財に登録されました。

御師丸岡邸とは、歴史・文化・歴史的建造物・まちづくりという分野で、保存・管理・活用という共通のテーマを持った活動だと考え、今回のイベントに参加させていただきました。主催者「旧御師丸岡宗太夫邸保存再生会議」は、当会の7～8年前の問題点、課題などが類似した状況にあると思い、多少の先行事例として、感想を述べます。

#### ① まちづくり活動の対象資源の調査・研究

##### <揚輝荘の掘り下げ>

・キーワードは、近代建築、歴史文化、庭園緑地、まちづくりであり、差別化を図るものとして、国際交流を加えています。これらの調査研究を、さらに細部へ掘り下げ、敷地内の大トンネル、橋の天井絵の隠し絵などを発見・究明してきました。現在改修をしている旧迎賓館「聴松閣」の外壁が、現状の地味な黄色ではなく、当初は、華やかなベンガラ色だったことを発見したときは、創建者・伊藤祐民のコンセプト、性格、好みに触れたような気がしました。

このような調査・研究による新発見は、スタッフの喜び、興味、楽しみ、意欲につながり、揚輝荘ファンの増強になります。また、これらのニュースはマスコミにも取り上げられ、情報発信の強化ともなります。

・御師邸についても、古文書、痕跡などから、新発見が期待できます。襖絵、かいこ棚、かまど等々、まな板の四隅に包丁の跡を発見して、当時の賑わいを感じたという、学芸員さんの顔は生き生きとしていました。

##### <地域、分野の拡大>

・揚輝荘という点から面（覚王山地区、東部丘陵）へと視野を広げることによって、茶室、寺町、文教地区、古窯址、街道、緑地、里山、ため池、人物（例：織田信秀・信長、徳川義直・宗春）等々は、すべて揚輝荘関連情報として捉えることができ、調査研究成果を発信することによって、多分野に関心を持つ市民を糾合することとなりました。

・御師邸についても、伊勢神宮、伊勢河崎地区との連携は勿論のこと、檀家が多かった飯田、御師を持っていた他地方（熊野、津島等）との提携、情報交換によるネットワークの構築や伊勢御師と戦国武将、芭蕉などの視点も加えることによって、伊勢御師発の情報が拡張強化され、関心を持つ人、ファンの増大が期待できます。

#### ② 公有民営をめざしたプロジェクトと考えた場合

##### <公有>

・まず、その資源を心から愛し、残し、育て、活用しようとする硬い意志と強力なリーダーシップを持つ公職者を確保することが不可欠だと思われます。縦割り行政の中で、単なる窓口では、トップ・議会にまでなかなか届かず、横の組織から足を引っ張られることが往々にしてあります。幸い揚輝荘の場合は、そうした伝説的な人物が会発足前から存在し、官庁の中で方向性ができており、ぶれなかつたことは大変有利でした。

・御師邸の場合も、チャネルはあるようですが、保存・活用の意義・効果を十分に理解してもらい、自ら牽引車になってくれる人材を発掘、説得、育成して、やる気にさせることができるとと思われます。公有決定までのハードルを越えれば、民営は付いていきます。

##### <民営>

・多分野の人材の集結が必要になります。揚輝荘は幸い、建築士6名を始め諸分野の学者・学生、郷土史研究者、庭園緑地、大工、石工、庭師、消防、電気、食品衛生、機械等々の専門家が集まつておらず、どの方向の活動もほぼ会員でカバーできるようになってきております。

しかし、ここに至るまでには、各種イベント（音楽会、茶会、園遊会、国際交流会、狂言、講演会、シンポジウム等）、展示（伊藤次郎左衛門家400年等）の開催、および各種PR発信（TV、ラジオ、新聞、雑誌、ホームページ、ブログ）を継続することによって達成できたものと考えます。

・民営の受け皿団体になるためには、それなりの経験、活用管理能力、信頼性が求められ、提案コンペをクリアしなければなりませんが、これは上記のようなイベントや情報発信を継続する中で、蓄積された結果の評価だと思われます。

・また、当会では、活動の基本的なスタンスを、お客様（入館者）の目線（ニーズ）に合わせることと考えています。ガイドを行つ

た来館者には、必ずアンケートをお願いし、名古屋市に伝えるとともに、管理活用の指針としています。「入館料を取ってでもいいから早く修理を進めてほしい」との意見が多くあります。こうした市民の声は、市としても税金を充当する上で最重視しなければならないところです。

・御師邸についても各種イベントの参加者には、ファン、リピーター、会員になっていただくよう、情報発信を継続していくことが必要だと考えられます。最近では、ホームページ、ブログを利用する人が多く、不特定多数に対するPRとしては、きわめて効果的だと思われます。揚輝荘を見学する小学生でも、ホームページを事前に見ている人が大半です。

#### ③ 活動資金

・ボランティア活動とは言え、人数と情熱だけでは継続することはできません。これの有無、大きさが活動の運命を左右するといつても過言ではありません。当会では、立ち上がりから3年ほど前までに、助成金を十数本獲得しています。建築、自然、まちづくり、国際交流など多分野にわたり、大小合わせて、1千万円近くになりました。当然、助成金を獲得することによって、活動の範囲・質、会員数は広がり、管理者受託にもつながったと考えています。しかし、相当のパワーを要することも確かです。

・助成金のニーズ・効果が最も大きいのは、活動の立ち上がり期だと思われます。揚輝荘の場合は、会発足（平成15年）後、法人化（18年）までの苦しい時期（平成16、17年）にHC財団の助成を受けられたのは、非常に助かりました。また、受託後も、イベント会場不足で悩んでいたときに名古屋都市センターから受けたハードウエア助成「まち夢工事」は会場設営（檜舞台など）促進に大変効果的でした。

・御師邸についても、活動助成金が2年継続獲得にならなかつたのは残念ですが、今回の実験プロジェクトをさらに活用し、先回の助成との継続性の上で、少し切り口を変えて2回目にチャレンジするとともに、様々な機関の助成も検討を続けていただき、活動が成功する日が来ることを願つてやみません。

**御師邸を現代に活かす視点**  
(選考委員 横浜国立大学教授 高見沢 実)

**① 当初、なぜ評価の高いプロジェクトとされたのか?**

今回の見学と議論を通して、なぜこのプロジェクトが高い評価を得たのかを事後的に整理すると、以下のような要素が浮かび上がった。

第一は、希少性。伊勢の御師というオンラインの世界(ナンバーワンかどうかは今後慎重かつ客観的な評価が必要)であり、これを残すことは高い公共性を有しそうであることが、御師をあまり知らない状態でも直観できた。第二は、緊急性。希少な価値を有しそうなその「御師」を「見える化」した御師邸そのものが、このままだと消滅の危機にある。早く何とかしなければならない、という思いが伝わってきた。第三は、可能性(人材と運動の方向)。これは実際に訪問してはじめてわかった面ではあるが、経験豊かなA氏(建築士)とB氏(市役所OB)を中心に少数精鋭チームが組まれており、それはある意味プロ的チームとなっていて、そこで立てられたビジョンとストーリーが明確。これは「できそうだ」と思わせるものがあった。第四は、主体性。もちろん、チームは主体的なのだが、その前提となる御師邸の所有者であるご主人C氏のしっかりした思いが確認できた。自分の経験でも、この街、この課題をなんとしてでも解決したいという当事者の強い思いがあれば、ほとんどの場合、結果はついてくる。第五は、実行力。まずは、人が「見る」ことができる状態に、という段階を初動期の1つのプロジェクトとして設定し、それを中心に関連要素を組み立てていた。そして設定されたプロジェクトは確実に実行でき、効果が「見える化」されていた。第六は、表現力。申請書には当時、訴えるものがあった。上記要素をしっかりと書き込んでいたのだろう。もう一つあげるとすると「相対的に元気のない山田の中心市街地を活性化させる起爆剤にしたい」との思いも綴られていたが、それはあくまで上記要素がしっかり展開できてこそ、その先にみえてくるもの。その、「こそ」が、「御師邸を起爆剤にして何かできそうだ」と思える形で表現されていたことで、このプロジェクトが高く評価されたのだと思う。

**② この1年間で何が展開したか?**

かなり短期間で初動期のエネルギー推進力が目に見える形にまで至つたことは、別に詳しく報告されると思う。建物内部の掃除がすすみ、タタミを入れ替えた部屋に人が集まるようになったことが大きい。見学会が開催され、特に、当時の食事を体験できるシカケが、女性層などの関心を引き付けている。さらに、「調査」のため各専門家、行政等がかかわる(巻き込まれる)ようになり、地元学生の若い力も引き出している。マスコミにたびたび登場し、知名度も徐々に上がりつつある。今後の運動の作戦も練られているようである。

伊勢河崎等での経験から人的ネットワークや経験が豊かであること、ナンバーワンかつオンラインの伊勢文化の強み、なども背景として各所でからんでいる。ただし、「御師」というものの実態と現代における扱い方については、いくらか工夫が必要と考えられる。この活動を広く展開していく際には、正確にその構造を解明し情報開示することが必要であるが、一方で、現代の文脈にうまく載せる戦略なども大切だと思う。

**③ 今後に向けた具体的アイデア 例示的に**

実際に宿泊して体験できることが重要だと思う。ただし、単なる旅館と差別化し、「ここでは無理なこと」を「ここでしかできないこと」に転じる。以下は、その具体像。

- ・御師邸に泊まる 体験ワークショップ、料理 (さまざまなバリエーション)、伊勢参り等
- ・御師文化拠点 世界的視点／全国の伊勢ファン／地域の学習拠点
- ・他の拠点と連携
- ・サステナブル伊勢のライフスタイル拠点
- ・循環する自然の恵みに感謝する場所
- ・20年に一度刷新される持続文化、それを通した技術や人材の伝承を学ぶ場所
- ・これらを通して山田中心市街地の活性化／伊勢の活性化／日本の新しい成長モデルの提示

**魅力的な交流空間のあり方／コミュニティを活性化させるには「社交の場」が必要**

(選考委員長 江戸川大学教授 鈴木 輝隆)

**① 住民組織によるコミュニティ活動は社会の先行指標**

古いものは遅れていて非合理的・非経済的と考え、すべてにわたって新しい文明が優れているとしてきた近代の日本。日本が培ってきた古くからの文化や、明治以後取り入れてきた文明の歴史を検証することなく、物質経済的な量の拡大から便利で快適な近代的な生活を追求してきた。社会システムには寿命があり、現代の日本社会は文明の転換期にあると、人々は気づき始めている。東日本大震災によって、日本は自然災害の猛威に対して無力な地域社会や、際限のないエネルギーを使用する近代の暮らしを見直さないと、未来はないと実感した。天災と共に生きてきた日本の暮らしの歴史から学び、相互扶助のあるコミュニティや地域を支える地場産業の大切さにも気がついた。ハウジングアンドコミュニティ財団の助成事業も20年目を迎える。最近5年間を振り返ってみると、公共課題はコミュニティの再生である。古民家再生や歴史的な建造物の保全活用など地域の記憶の伝承であり、子育て支援や高齢者・社会的弱者など自力で生きていくことが困難な人たちの支援であり、がんじがらめになつた

コミュニティを再生しようとするアート展などによるコミュニケーションの活性化などである。

かつて公共課題は行政だけの役割であったが、現在の自治体のパワーは弱体化し、住民の力を借りることなしには何も解決しない。NPOなど自発する住民組織の活動には目を見張るものがある。低成長時代に入り、課題は多くなったが、自治体や企業は長期戦略を持ち得ず、コストダウンをめざして、解決を市場に任せようになった。市場原理だけでは、公共課題は解決しない。

文明が発達すればするほど、エネルギーを必要とし、市場の拡大により社会のリスクは増加する。文明が高度に発達すれば、高学歴による少子高齢化や、人々のストレスは増し精神的に弱体化し、社会への適応力はなくなり、低成長になるのは当然である。コミュニティや個人の精神を弱体化させてきた文明は転換期を迎えてきていることは、危機感を持った住民の活動にまずあらわれる。コミュニティ活動の傾向が文明の転換期を予測させる。コミュニティ活動は社会の先行指標となり、時代を先取りしていることが多い。

今回は、古民家再生や歴史的な建造物の保全活用など地域の記憶の伝承を、共同研究として取り組んだ。そして、私に課せられた課題は、「魅力的な交流空間のあり方」である。

**② コミュニティを活性化させるには「社交の場」が必要**

名古屋市の「揚輝荘」と伊勢市の「旧御師丸岡宗大夫邸」保存活用事業を案内していただき、お話を聞かせていただいた。いまでは歴史的価値あるとされた建造物も、価値ははじめから認められたものではなく、多くの人たちに共感を得ることから始まっている。とくに民間の建造物は放置され中に入ることもできず、いつの間にか地域の人びとの記憶から忘れ去られてしまっている。長年放置された建造物や価値ある建造物ほど、改修費に多額の資金が必要となる。

2つの活動団体のこれまでの活動を振り返って、その方法論をまとめておきたい。活動の順序は、

- ① 同じ思いの志ある仲間が集まる。
- ② 仲間とともに歴史的な価値を広く深く学ぶ。
- ③ 多くの人に歴史的な価値を理解してもらう機会を作る。
- ④ 参加しやすいイベントを企画し、マスメディアなどでPRを行う。
- ⑤ この成果をもとに、行政職員に働きかけるとともに、助成団体に応募をする。
- ⑥ 助成金などを得て、建造物内部の清掃や緊急的な修復を行う。
- ⑦ 建造物内部に人が入ることができ、人が集まることができる場を確保する。
- ⑧ 建造物を保存活用する意味を多くの人と共有する。
- ⑨ イベントなど参加のお客様の中から活動を担う人を育てる。
- ⑩ コツコツ活動しながら、実現可能な将来構想を描く。
- ⑪ 建造物修復と保存のための資金を行政や企業などの理解から

得て、本格的な工事を行う。

⑫ 建造物の修復が終われば、多くの人が交流することができる場として、さまざまな企画工夫を行い、全体のマネジメントを行う。

こうした手順となるのであろうか。手順一つひとつに、経験から得たノウハウやポイントがある。手順全体を通して大切なことは、活動の始まりから建造物を「社交の場」として活用していることである。

現代のメディアは、マスメディアからソーシャルメディアまで高度に発達して、コミュニケーションは盛んになったが、直接人が出会う社交の場がない「個の時代」。記憶の継承となる歴史的な建造物は、地域遺伝子となり、コミュニティにおける信頼のマネジメントの核となる可能性があり、社交の場が少なくなった現代において、歴史的な建造物はコミュニティの新しい役割を担うことができる。公共の課題は、消えゆく地域の記憶の継承とコミュニティの社交の場の創出であり、これによって個人の建造物が公衆性を持つことで、活動に行政の協力を得ることもできる。

社交の場とは、多様な価値観をもった人びとが、自分の暮らしでいる社会は狭いと知り、価値観は違っても、お互いが楽しくコミュニケーションをすることによって、寛容に柔軟に社会をマネジメントする場である。こうした異文化を楽しく理解する「社交の場」の仕組みが観光である。フランスは世界最大の観光地で、8000万人以上の人々が集まる「社交の場」を作り、世界の人々を楽しませてくれる。社交こそ、観光の本質である。

「揚輝荘」は、大正昭和のアジアの留学生との交流の場の歴史をもち、「旧御師丸岡宗大夫邸」は804年、皇大神宮儀式帳にも記録される御師の長い歴史があり、当時から社交の場として人びとの暮らしを豊かにしてきた。日本だけでなく世界の人々が訪れる「社交の場」となり、歴史から感動と驚きを得て、豊かな交流から日本や世界を幸せにする社会事業として、市民活動を継続してほしいと願っている。



旧御師丸岡宗大夫邸の保存再生について  
—ヒヤリングを踏まえて—  
(NPO法人 旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議 高橋 徹)

外は皆のもの内は自分のものという認識を市民に理解を進めるとの指摘については、歴史的町並み保存運動の第1回町並ゼミのテーマとして、「町並みはみんなのもの」を合言葉に活動を開始したことを現在も念頭においている。常時人が入れるように仕掛けることで外も内も皆のものとしての公共財になるとの指摘は、建物を開放することで市民の理解が深まり、また自分達の大切な宝物として繋がりが意識できる上、建物の開示ができ、見学できる機会ができるることは大きな力になる。建物は私的財産であるが、その価値によっては公共財でもある。そのためには合意形成が求められる。がそのものの先の姿が見えることが大事で、そうすれば光明が見える。

公共の課題として、景観の保全・創造、まちづくりにおいて責任ある主体が求められている時代である。活動に当たり、このことを意識することは、行政との行動を容易に進める上で重要である。建物の持つ場の力、空間の力は、各自それぞれ感じ方は違うが、何かしらの影響力を持つものである。長い間空家状態であった歴史的建造物の保存再生においては、その活動の初期において環境改善やその価値を顕在化させることが必要であり、その過程で様々な助成を含めた支援を得ることは、活動を持続または発信していくために有効な手段である。

保存活動を継続していく中で色々な事が重なり、ものごとが成果を生む事がある。そのためにはツナギが大事である。

建物にまつわる物語の中にソフト事業が潜んでいる。そのストーリーを見つけ出し、建物保存と共に事業展開をしていく。丸岡邸であれば御師の檀家の交流というキーワードから、あるいは文人墨客との交流など御師が活躍した交流の歴史を今に生かすことがその一つである。御師の館としての建物の歴史的価値と御師文化の全国と繋がった交流の歴史文化をアピールできる。

色々な人をコーディネートし情報発信していくことで、特別な人がやっているのではないことを示し、市民を味方につけることが大事である。

新たな仲間を得るには無理をしないことが大事で、まずはお客様として参加してもらって、より興味を持ってもらえたスタッフになってもらう。若いにもこの方法が良い。

御師の末裔の方々にも呼びかけ参加してもらう→積極的な方が多いと思う。

地域にある御師資料の収集→神宮徵古館、神宮文庫に多くある御師の全国地域との交流を掘り起こす事は色々な面で役立つ。女性の視点も考慮することが大事。

建物はここにしかないので、中に入れることは大きな魅力になる。知りたいという興味が大きくなる。復元できれば御師のことを理解してもらえる重要な場になる。小学生、中学生が訪問できるように整備したい。

## Ⅴまとめ

地域にゆかりの建物の保存と活用は、建造物の状態、経緯、地域の状況等によって、それぞれ独自の取り組みが必要になるが、今回のプロジェクトを通していくつかの論点が浮かび上がってきた。

### ①モノとしての整備

- ・地域にゆかりの歴史的建物は、そのまま活用できるものは多くない。保存をするためにも、修理等が必要になる。まず、当該建造物を活用できるよう清掃から始めて、補修等を行い、モノを見せられるようにすることが大切である。
- ・歴史的建造物には、歴史が刻みこまれている。その歴史性を分かりやすい物語として提示することが、モノとしての建物に意味を与えることにつながる。
- ・使い方にも、歴史やその土地ならではの工夫が必要（御師邸では「もてなし」、揚輝荘では「国際交流」など）

### ②活動主体

- ・当該建造物の価値を見出し、熱心に保存活用を進める人材がいることが不可欠であるが、建築や郷土史などの専門家がその価値を見出していく活動主体に加わると、活動を円滑に進められる。
- ・多様な人々が参画しやすいこと（幅広く受け入れ、出入りも可能）と、活動に参加した専門家の技術等が評価される仕組みも考えるべき。

- ・特定の人だけで行う活動は、根気の面でも困難が予想される。
- ・当該建造物の所有者が活動主体になることは、大きな力になる。
- ・イベントを行うことは、活動の周知を図るだけでなく、様々な技術を持つ人を説き参加を促す有効な手段もある。

### ③市民の共感

- ・市民の共感や支えを得ることが大切。そのためには、情報の提供、市民が訪れる機会の提供、建物を実際に見てもらうことが必要。
- ・情報提供にあたっては、市民の目線で分かりやすいものとともに、小中学生等への対応も考える。

### ④行政との関係

- ・歴史的建造物を長く維持管理していくことは、民間の力だけでは困難な場合が多いと考えられる。行政が本格的に関与を始めるまでの環境整備を民間が担当している、と考えることもできる。
- ・行政との連携や行政の関与が望ましいが、そのためには、行政の関与の必然性（市民の強い要望、建造物としての価値や歴史的価値の明示、地域の活性化への貢献等）を示さなければならない。

### ⑤地域との関係

- ・歴史的建造物は、周辺のまちと無関係に存在しているわけではない。周辺の状況と相互に影響し合っていることを考慮するべきである。
- ・地域に存在する様々な資源と連携して、地域として建造物の価値を高め、当該建造物を通じて地域全体の価値も高めるようにすることが必要である。
- ・多様な人が出会う公共性を帯びた社交の場（御師邸は、元々外からの風を入れる社交の場であった）とし、地元住民同士や来訪者が気軽に集えるようにすることも大切である。

### ⑥活動の広がり

- ・助成金などを取得することは、一定の期間に結果を出す誘因になるとともに行政や地域住民に活動をPRする上でも有効である。
- ・類似の活動をしている他地域の団体と交流を持つことは、活動の広がりを作るために大切である。

## VI 実験プロジェクトについて

実験プロジェクトは、住まいとコミュニティづくり活動助成事業の中で、助成対象団体の活動の状況等を考慮の上、事務局において研究対象団体を選定し、団体と共同で研究・検討を行うもので、平成23年度（2011年度）からはじめた取り組みです。実験プロジェクト対象の選定にあたっては、団体の現地での活動内容と進捗状況等を考慮するとともに、様々なまちづくり活動の実践に参考となるかどうかという視点から選択しました。

### ○平成23(2011)年度の実験プロジェクトの選定

平成23年度の実験プロジェクトの対象は、NPO法人旧御師丸岡宗大夫邸保存再生会議としました。現在、地域にゆかりの建物の保存や活用によってまちづくりを進めている活動は、全国的にも多数に及び、本活動を対象にすることは、今後他の類似活動にとても活用可能な材料を提供できると考えられます。選定のポイントは次の点です。

■旧御師・丸岡宗大夫邸は、伊勢市に残る唯一の御師邸であること所有者も建物を残したいという強い意向を持ち、メンバーの一員として活動していること

■主要メンバーは、これまでに伊勢河崎を代表する古い商家を伊勢河崎商人館として運営管理するなど、保存・活用活動の実績を有していること

■平成25年（2013年）の式年遷宮に向けて、地元の盛り上がり等が期待できること

なお、今回のプロジェクトを進めるに当たり、歴史的な建造物の活用の先進事例であるNPO法人揚輝荘の会を比較対象の事例として取り上げ、同会のメンバーにも当プロジェクトへの参加をお願いしました（同会は行政からの信頼が厚く、揚輝荘の暫定的管理も担っており、助成時以降、活動を大きく発展させています）。



